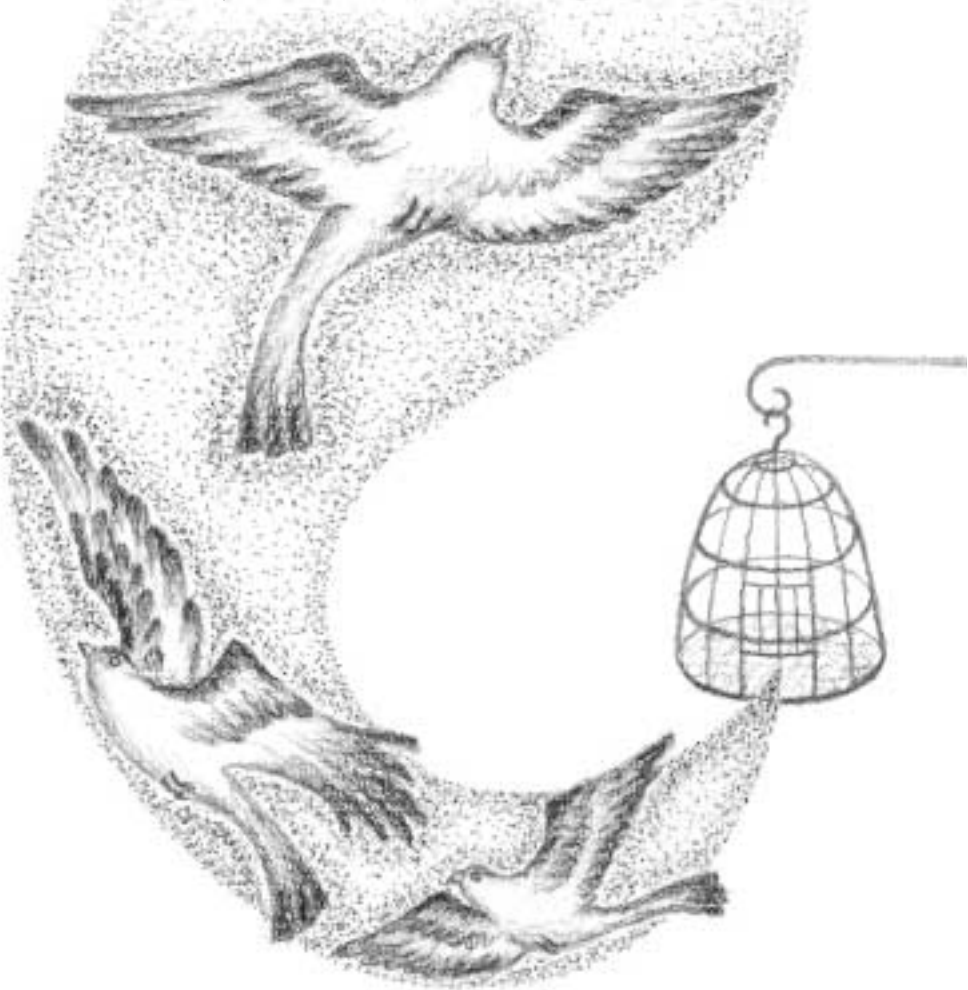


「とらわれ」に気づく

よいことをしているはずなのに、周囲からあまりよい反応が返ってこなかった経験はありませんか？ もしかすると、「よいことをしている」と思っている心に落とし穴があるのかもしれない。



二十歳の誕生日に



歳)です。

「家族いっしょにドライブするなんて、久しぶりだね」

車の後部座席では、妻の芳子さん(49歳)が隣の二郎さんに話しかけます。

「そうだね。幸一も圭子も、学校の部活動や友達ちとのつきあひが多くて、家族

十月のある日曜

日、山中二郎さん

(53歳)は家族を連

れてドライブに出

かけました。運転

は、きょう二十歳

の誕生日を迎えた

長男・幸一さん。

助手席の案内役は

妹の圭子さん(17



全員で出かけることが少なくなつたからね。幸一、よく誕生日に時間が空いたものだな」

「うん。友だちが誕生会をやってくれる予定だったんだけど、一人つごうが悪くなつてき。結局、明日に変更になつたんだ」

「そんなこと言っちゃって、実は彼女のつごうじゃないの、美穂さんだったかな？ ねえ、お兄ちゃん？」

「圭子、うるさいぞ！」

「えへへ。それより、日曜日で、お兄ちゃんの誕生日なのに、どうして東京デイズニーシーじゃなくて成田山なりたざんなのよ、お父さん！」

「なあに、ちよつとな……」

「いいじゃないの。お父さんが『みんなで行こう』なんて言い出すのはめずらしいんだから」と、芳子さんが助け舟を出してくれました。

二宮金次郎？



車を駐車場に停めて、しばらく門前町を歩いて境内へと向かいます。

幸一さんと圭子さんは、立ち並ぶお店を仲良くのぞきながら、一足先を歩いて行きま

赤や黄に色づきはじめた木々に秋の深まりを感じながら石段を登りきると、成田山新勝寺しんしょうじの大本堂が姿を現しました。

「お父さん、ここに来たのは二度目と言っていたね。前はいつ来たの？」と幸一さん。

「もう十年くらい前かな。そのとき知っ

※成田山新勝寺：天慶3年(940年)、現在の千葉県成田市に寛朝(かんちょう)が開山。不動明王をご本尊とし、毎年全国から多くの参拝客が訪れる。成田のお不動さまとして有名。

たんだが、ここは二宮金次郎が修行に來て悟りを開いたところなんだよ」

「二宮金次郎って？」

「圭子、薪を背負って本を読む姿の石像、知らないの？」

お母さんが子どものころは、よく小学校の校庭に建っていたものよ」

「そうだね。今では、ほとんど見かけないが、二宮金次郎といえ、以前は「勤勉・努力」の象徴だったからね。幸一は知っているだろう？」

「二宮尊徳という名前は知っていたけれど、金次郎と同一人物だと知ったのはつ

い最近だよ」

そんな子どもたちの話を聞いて、二郎さんは言いました。



「実は、ここにドライブに來たのも、二宮金次郎のことを知っておいてほしかったからなんだ。お父さん自身も、二宮金次郎の生き方から、とてもいい気づきをもたらしたことがあつたからね」

二郎さんは境内を案内しながら、成田山新勝寺と二宮金次郎のこと、そして十年前のできごとについて話しました。

二宮金次郎と

「成田のお不動さん」

成田山新勝寺は、江戸末期に、疲弊した六百五の町や村を復興させた篤農家・二宮金次郎（のち尊徳、一七八七〜一八五六年）が、四十三歳の時に断食修行をした寺としても知られています。今から百七十四年前のことです。

当時、金次郎は、小田原藩主からの、その分家の領地・野州桜町（現在の栃木県二宮町）の復興を命じられて全精力を傾けていました。しかし、金次郎の復興についての考え方や方法は、藩の役人やその土地の人々にとってはなじみがなく、なか



なか理解してもらえませんでした。あるとき、赴任してきた役人は金次郎のやり方にことごとく反発しました。そ

ればかりか復興事業を妨害するありさま
でした。復興への道のりは険しく、遅々



として進まなくなりました。人一倍意志
や忍耐力が強く、事業に情熱を持った金
次郎でも、絶望的になりました。

思い悩んだ金次郎は、誰にも行き先を
告げずに突然姿を消しました。

金次郎には、たとえどのような妨害が
あろうとも、自分に強い信念があれば何
でもないのではないか、そう思えないの
は自分に不動心が欠けているからではな
いのか、という思いがありました。

そこで成田山新勝寺、いわゆる「成田
のお不動さん」にこもり、三週間、断食
祈願をしたのでした。

断食修行で金次郎は大きな気づきを得
ました。そして、このときを境にして桜
町の復興事業は徐々に進展していったの
です。

義姉への不満

二郎さんが、以前に成田山新勝寺を訪れたころ、二郎さんはお姉さん（義姉）のことで悩みを抱えていました。

当時、次男の二郎さんは、実家から二時間ほどの隣県に住んでいました。実家には母親と長男家族が同居していました。父親は二郎さんが子どものころに亡くなっています。

そのころ、母親は毎月のように孫の顔を見に二郎さんの家を訪れていました。しかし、年齢も七十歳を越えると、だん

だんと来られなくなってきました。

あるとき二郎さんは、当時、小学校五年生だった幸一くんは何気なく、

「おばあちゃんは、今までは毎月のように幸一たちの顔を見に来てくれていたのに、もう来られなくなってしまったね」と言いました。

すると幸一くんは、

「今まで何度も来てくれたんだから、今



度は、僕たちがおばあちゃんに会いに行こうよ。お父さんやお母さんが行くときは、僕たちで留守番するよ。もう僕たちだけでもだいじょうぶだから」と言っただけです。

二郎さんは、顔から火が出る思いでした。「負うた子に教えられる」とは、このことでした。親からしてもらっているばかりの生活に、ありがたいという思いはあっても、日々の生活に追われて、こちらから出向くことは、一年に数回程度でした。

それからというもの、二郎さんと芳子



さんは、できる限り子どもたちを連れて、毎月一回、母親の好物をお土産に持って元気な顔を見せに行くようにしたのです。母親は、毎月、二郎さん家族の訪問を心待ちにしてくれていました。

あるときのことです。二郎さんは、お姉さんのようすがいつもと違うことに気づきました。何となくよそよそしく、こちらから声をかけても気持ちのよい返事が返ってきません。少し疲れているのかなと思いました。

そのことを芳子さんに話すと、芳子さんは、もう数か月前から、お姉さんの態度が変わってきたことに気づいていました。

しばらくすると、母親からお姉さんについての愚痴を聞かされるようになりま



した。態度が冷たくなり、ときにはとげとげしい言葉を投げかけられるというのです。今まで、そんなことはなかっただけに、母親もショックを隠せないようです。

「もう少し親を大事にして、やさしい言葉の一つもかけてくれたらいいのに」
二郎さんは、お姉さんを責める心や不満に思う気持ちが湧き出てきて、しかたがありませんでした。

そんな二郎さんのお姉さんに対する不満の心は、少しずつ言葉づかいや表情に表れ、お姉さんに伝わっていったのでした。関係はますますこじれていきました。

「一度、兄に話してみようか、それとも直接お姉さんに聞いただしてみようか」という思いが続きました。

金次郎の

気づき

そんなとき、二郎さんは仕事上の知り合いから、たまたま「成田のお不動さん」で修行した二宮金次郎のことを聞いたのでした。

そのころの二郎さんは、遠い過去の人物などにはまったく関心がありませんでした。二宮金次郎など、古めかしい刻苦^{こくく}勉強^{べんれい}※^しいられるような印象があり、むしろ毛嫌^{けざら}いしていたといつてもよいでしょう。

しかし、その知り合いが「二宮尊徳か

らは学ぶことが多い」と力説していた姿が心から離れず、二郎さんは自分でも金次郎のことを知りたいと思ったのでした。そこで二郎さんは書物を読んだり、知人から聞くなどして、金次郎の生き方を調べました。その中で、特に二郎さんの心をとらえたのは、次のような話でした。

*

二宮金次郎は、宿泊していた成田山の門前^{もんぜん}の参道にある宿屋の主人から、名僧として名高い貫主^{かんじゆ}の照胤和尚^{しょういんおしょう}を紹介されました。金次郎は、さっそく照胤和尚を訪ね^{たず}、事の経緯^{けいゐ}と自分の願いを話して入門を求めました。

すると金次郎は、二十一日間の断食修行を勧められました。そして修行の中

※刻苦勉強：苦勞を重ねて努力すること。

で、次のような気づきを得たのです。

——世の中には、善悪、強弱、遠近、貧富、男女、夫婦、老若、苦楽、寒暑、生死など、互いに対立し、対照となっているものが無数にある。

また、同じ刃物でも、木を削るときは切れなくて困

ると思うが、指を怪

我したときは、切れ

ないほうがよかつ

たと思う。花見の

舟に乗ろうとし

て、断られれば花

見舟を恨むが、花

見舟が事故で沈む

と、乗らなくてよかつ

たと思う。このように禍



福、幸災など、互いに対立するものがあ

る。いずれも、一つの円を思い描けば、その半分ずつが対照になっている。世の中のことは何ごとも、それに対する別の半

円と合わせて、一つの円、つまり

全体となる。

自分は、いままで復興事業を妨害するものは悪人であると思つて疑わなかつた。その半円の思いにとらわれて、がんばじからめになっていた。だから、その悪人に制裁を加える必要があると考えていた。しかし、そ

うでないことがわかった。反対者には反対の理由があり、反対者が出るということは、反対させる原因が自分のほうにもあることに気づいた――

金次郎は、自分の気づきを次のような歌で表しています。

打つところ あれば打たるる 世の中よ
打たぬところの 打たるるは無し

断食の最後の七日間、金次郎はわずかな碗一杯の粥でも体の隅々に行き渡って、栄養として吸収されていく実感を味わったといえます。

金次郎は、どのようなものでも受け入

れる肚ができ、不動明王のように、たとえどのようなことがあっても、復興を果たすまでは桜町を動かないという信念ができたのでした。

(参考)三戸岡道夫著『二宮金次郎の一生』栄光出版社)



「とらわれ に気づく」

二郎さんは、母親を訪ねることを良いことと信じて疑いませんでした。それも毎月です。褒められこそすれ、非難されることではないと考えていました。そし



て、母親に冷たくあたるといってお姉さんを悪人と決めつけ、心の中で責め、打ち、非難していました。

しかし、このような思いに自分自身がとらわれていたことに気づかされたのでした。

七十歳を過ぎた母親の面倒はもちろん、商売をやりくりしていたお姉さんにとつて、毎月のようにやってくる二郎さんの家族は、負担に思われてもおかしくありません。

母親にすれば、毎月、お気に入りのお土産を持ち、かわいい孫たちを連れてやってくる二郎さんたちのほうが、よく映るものです。それに比べると、毎日、生活を共にしているお姉さんたちは、いつもよい顔ばかりはしてられません。

先人から 学ぶ



「ふーん、そんなことがあつたんだ。知らなかつたわ。お母さんは知つてたの？」と圭子さん。「もちろんよ。でも、ここのお不動さんでのことは知らなかつたわ。お父さん、いろいろ

と考えてくれていたのね。見直したわ。ところで幸一、何か考え込んでいるみたいだけれど……」

「うん。昔より今のほうが科学も文化も進んでいるよね。だから考え方や生き方も、昔の人より僕たちのほうが進んでいると思つていたんだ。でも、お父さんの話を聞いて、すべてがそうでもないような気がしてきたんだ……」

「なるほど、それはお父さんも気づかな

二郎さんは、そうしたお姉さんの気持ちを察（さつ）することのできなかつた自分のいたらなさに、気づくことができたのでした。

それ以来、二郎さんは芳子さんと相談

して、実家を訪れたときは、まず最初に、感謝の言葉と心を添（そ）えて、お姉さんにお土産を渡すように心がけました。それからは、だんだんと、お姉さんとのわだかまりも薄（うす）れていったのでした。

かったな。『歴史上の人物から学ぶ』というけれど、考え方や生き方については、先人から学ぶことがたくさんあるということだね」

いつしか、境内の三重塔さんじゅうのとうが長い影を落



としていました。日も大きく西に傾き、空は一面にまばゆいばかりの茜色あかねいろに染まっています。

「さあ、きょうは幸一の誕生日よ。これからお祝いの夕食に行きましょう。帰りの道沿いにあるお店を、お父さんが予約しておいてくれたのよ」

「ほんとう！ お父さん、やるじゃない！」と圭子さん。

「きょうは、みんなを連れ回して悪かったな」

「そんなことはないよ。二十歳の誕生日のいい思い出になりそうだよ」

その幸一さんの言葉に、芳子さんも、圭子さんも同感でした。山中さん家族を乗せた車は、ゆつくりと坂道を下って行きました。